

平坂鑄物

令和7年12月13日(土) ~ 令和8年2月8日(日)



一色学びの館企画展

平坂鑄物

令和7年 令和8年
12/13[土] → 2/8[日]

西尾市立一色学びの館 多目的室
愛知県西尾市一色町一色東前新田8

開館時間 / 午前9時～午後7時
休館日 / 月曜日【1/12(祝)は開館】
年未年始(12/29～1/3)

HEISAKA IMONO

『参陽商工便覧』(部分、加工あり)/須田町 辻判八家文書

平坂の鑄物は、自動車部品や工作機械、水道管などわたしたちの日常のさまざまな場面で使われており、鑄物は西尾を代表する地場産業の1つとなっています。

西尾の鑄物産業は約350年前から続く伝統産業で、江州辻村の鑄物職人・太田庄兵衛と甚兵衛が平坂にやってきたことから始まりました。平坂で鑄物が発達した理由として、原材料や製品の輸送に都合の良い平坂湊があったことが考えられ、太田家は平坂を拠点に梵鐘や鍋釜を数多く製作しました。明治時代に太田家が廃業した後も、鑄造技術は平坂の地に受け継がれ、「西尾市鑄物工業協同組合」には現在31社もの企業が所属しています。

本展では、西尾の鑄物の発展に貢献した平坂湊との関わりにも触れつつ、その歴史や取り組みを紹介します。

令和7年12月 西尾市立一色学びの館

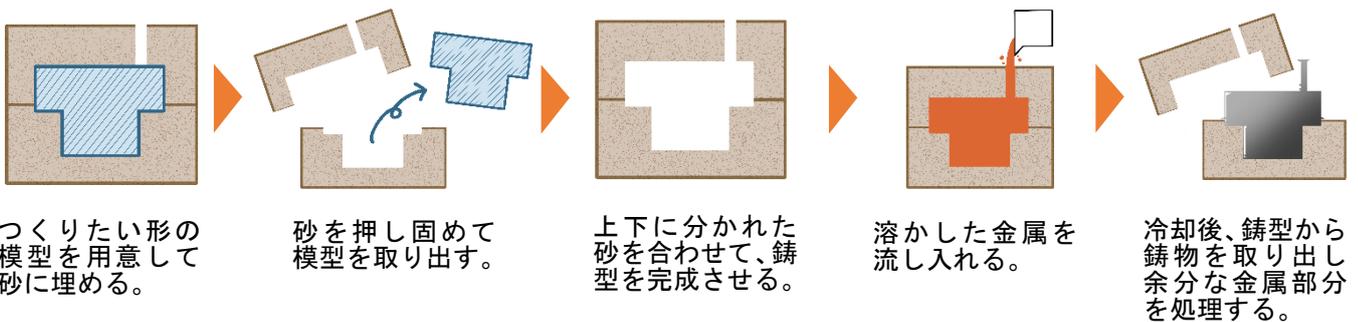
第1章 鋳物ってなに？

わたしたちの身の回りには金属を使った道具や設備がたくさんあります。人類は古くから、かたい金属をさまざまな方法で加工し、利用してきました。高温で溶かした金属を型に流しこんで冷やし固める方法を「鋳造」といい、鋳造でつくられた製品を「鋳物」と呼びます。

鋳造のメリット

- 型があれば、複雑な形でもつくることができる。
- 小さいものから大きなものまで、さまざまなサイズをつくることができる。
- 少量生産にも大量生産にも対応できる。
- ほとんどの金属を材料にできるため、材料の自由度が高い。
- 一度つくった鋳物を再び溶かして、再利用することができる。

▶ 鋳造のながれ



鋳造の歴史は古く、紀元前4,000～3,000年ごろにメソポタミアで生まれ、日本には弥生時代に伝わりました。はじめは青銅で銅鐸や銅剣、銅鏡などがつくられ、祭祀用や権力を示すために使われました。

6世紀に仏教が伝来し寺院が建てられると、梵鐘や灯籠などの仏具や、仏像がつくられるようになります。また、大化の改新を経て、律令国家が誕生すると、国家事業として鉱山の開発や金属資源の採掘・精錬が活発に行われ、日本の鋳物技術は大きく発展しました。

室町時代になると長く続いた戦乱がおさまり、能や生花などとともに茶の湯が流行します。武家や商人たちは競って茶会を開き、そのための特別な茶の湯釜をあつらえました。また、鋳物師たちによって仏像や梵鐘のほか、鍋や釜といった日用品、クワやスキなどの農耕具もつくられるようになります。

18世紀にイギリスで産業革命が起こると、より強靱な金属が生産されるようになり、蒸気機関車や鉄橋といった大きく丈夫な鋳物をつくるのが可能になりました。19世紀には日本にもヨーロッパの技術が導入され、大きく近代化していくことになります。

第2章 水運の要所 平坂湊

江戸時代、江戸と大坂のほぼ中間にあり、矢作川と三河湾に面している西尾は水運に恵まれた土地でした。

徳川家康による慶長10年（1605）の矢作川開削以前は、米津が船運の要所だったと考えられています。しかし、新矢作川の上流から運ばれてくる土砂によって、米津は湊の機能を失い、新たに河口近くに位置することになった平坂湊が、大浜・鷺塚・犬飼・御馬とともに幕府によって「三河五箇所湊」に指定されました。

三河木綿

平安時代、崑崙人が福地に綿の種を伝えたという伝説から、三河は綿栽培発祥の地といわれ、江戸時代には全国有数の木綿の産地となりました。西三河の湊から廻船で江戸へ運ばれ、なかでも平坂と大浜は大きな廻船問屋があったことから、多くの木綿を扱っていました。

塩の道

海水からつくられる塩は、山間部の人びとにとって貴重なものでした。三河湾沿岸で生産された塩は平坂湊に集められ、岡崎の塩座を経由し、馬で足助の塩問屋まで送られ、さらに信州へと運ばれました。平坂湊から信州までを結ぶ「塩の道」は、人びとの暮らしを支える重要な交通路でした。

矢作川と三河湾を結ぶ接点として、平坂湊は重要な役割を果たしていましたが、次第に上流からの土砂によって遠浅になってしまいます。これを利用した新田開発が盛んになる一方で、平坂湊は湊としての機能が低下していきます。そして、昭和に入り、陸上輸送が中心となると、矢作川の水運の需要は急激に減少し、現在は港としての役割は失われつつあります。

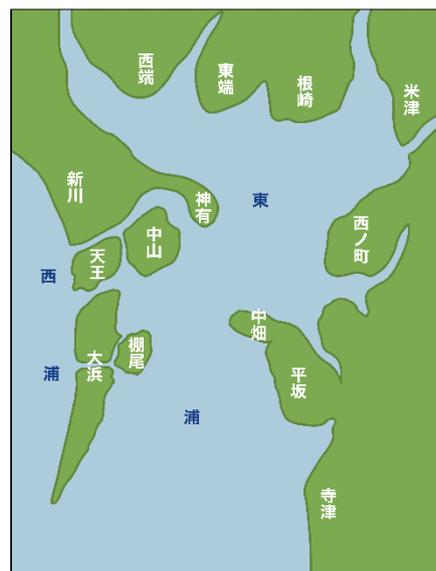
平坂湊と鑄物

西尾の鑄物は平坂を中心に発展しており、その背景には物流の拠点であった平坂湊の存在が挙げられます。鑄物づくりには、原料の鉄や燃料となる木炭など、大量の資材が必要ですが、これらは西尾周辺では産出されませんでした。そのため、平坂の鑄物師たちは、原料の鉄類は山陰地方から、燃料となる木炭は矢作川上流の山間部から調達しました。これらの物資は海路や矢作川の水運を利用して平坂湊に運びこまれ、さらに、平坂でつくられた製品も湊を経由して各地に搬出されていたと考えられます。



いもじい

矢作川の河口から鑄型に使う良質な砂が採れたことも、平坂で鑄物が発展した理由の一つと言われておるのじゃ



江戸時代初期の平坂周辺の地形



現在の平坂周辺の地形

『川船の路 改訂第五版 矢作川の川船記録』を元に作成

第3章 西尾の鋳物のはじまり

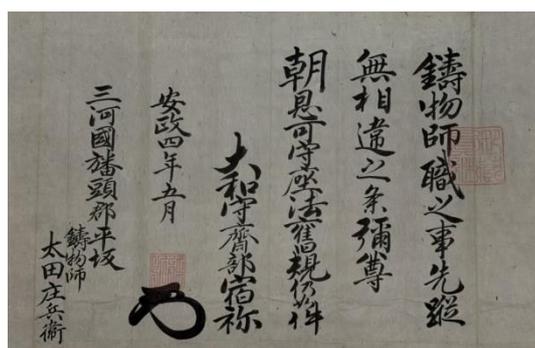
和暦	西暦	できごと
寛文 11年	1671	近江国辻村（滋賀県栗東市）で鋳物業を営んでいた太田庄兵衛が三州平坂に移住して鋳物業を開業する。
12年	1672	太田庄兵衛が桂岩寺（上矢田町）の梵鐘を鋳造する。 以降、約130年にわたり太田庄兵衛、甚兵衛によって、西尾市域や周辺地域の寺院の梵鐘がつくられる。
享保 元年	1716	「享保のころ、西尾藩主に招かれた近江国の太田庄兵衛、甚兵衛が平坂で鋳物業を開業した」という言い伝えがある。
明和 元年	1764	大給松平氏が西尾藩主になる。
寛政 12年	1800	このころを境目として梵鐘の需要が減り、鍋釜などの日用品の製造が増える。
文政 7年	1824	太田家が鑪（炉）を1基増やし、設備を拡張する。
慶応 3年	1867	大政奉還
明治 21年	1888	太田家12代・庄造が阿弥陀院（楠村）に太田倭三郎とその子孫の墓を鋳物製で造立する。
27年	1894	日清戦争 太田家が鋳物業を廃業する。
28年	1895	太田家の職工長であった奥谷広吉が鋳物業を開業する。
29年	1896	石川みのりが太田金屋旧地の一部で石川工場を興し、日露戦争ごろまで続ける。
35年	1902	古居皎が新工場を興す。
37年	1904	日露戦争 松崎己之吉が鋳造所を設立する。
大正 3年	1914	第一次世界大戦がはじまる。
10年	1921	「平坂鋳物同盟会」が結成される。
12年頃	1923	金物問屋であった伊藤小三郎が伊藤鋳造所を構える。
昭和 5年	1930	「平坂鋳物同盟会」が「平坂鋳物同業組合」に改称される。
14年	1939	第二次世界大戦がはじまる。
15年	1940	「平坂鋳物同業組合」が「幡豆鋳物鉄工工業協同組合」に改称される。
18年	1943	中小企業協同組合法が施行され、「平坂鋳物協同組合」と改称する。
20年	1945	終戦
38年	1963	「平坂鋳物協同組合」が「西尾市鋳物工業協同組合」に改称される。
51年	1976	組合事務所を現在の場所に移転する。
58年	1983	組合に青年部会（青風会）が設立される。
平成 13年	2001	日本鋳物工業会加入
令和 3年	2021	西尾市鋳物工業協同組合が創立100周年を迎える。

鋳物師 太田家

西尾の鋳物業の起源は諸説ありますが、寛文11年（1671）に近江国辻村（滋賀県栗東市）で鋳物業を営んでいた太田庄兵衛が平坂に移住し、鋳物業を開業したことがはじまりとされています。鋳物師の太田家には庄兵衛家と甚兵衛家の二家があり、ともに平坂に工房を構えて、西三河を中心に多くの梵鐘を鋳造しました。

彼らの出身地である辻村では古くから鋳物づくりが行われ、辻村の鋳物職人（鋳物師）たちは、江戸時代には日本を代表する鋳物師として知られていました。また、辻村鋳物師の特色として、全国各地に出職・出店していったことが挙げられ、太田庄兵衛、甚兵衛もそのような辻村鋳物師として活動していました。彼らが拠点を置いた平坂の近くには、当時三河有数の都市として栄えていた西尾があり、太田家は西尾やその周辺の大きな鋳物需要に応えることで繁栄します。

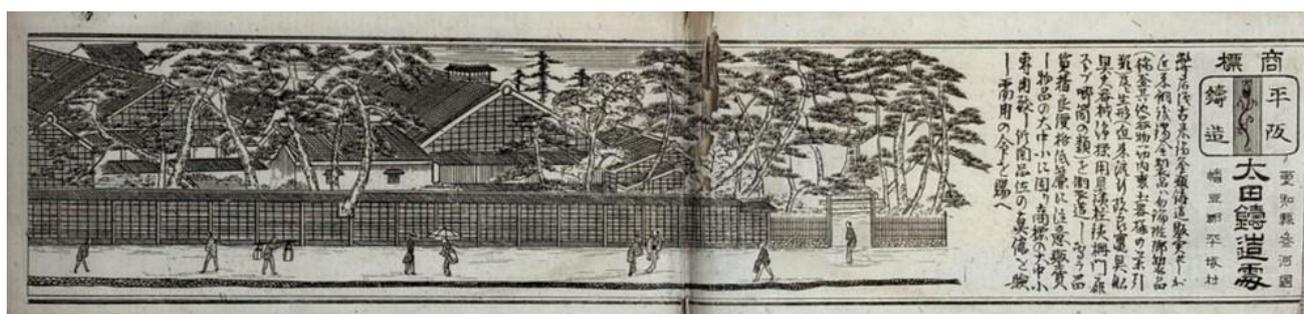
甚兵衛家は文化5年（1808）に断絶してしましますが、庄兵衛家は第12代・庄造まで続き、明治時代までの約220年間、平坂で鋳物をつくり続けました。



鋳物師職許状

安政4年（1857）/東京都太田家文書

全国の鋳物師を統括していた、京都の下級公家・真継家から太田庄兵衛に出された鋳物業の営業許可証です。公的な許可を与えられた鋳物師は「勅許鋳物師」と呼ばれ、諸役（税）の免除や諸国の往来の自由などの特権が与えられる代わりに、鉄燈籠の献上や行事の祝儀金を真継家へ納める義務を負っていました。



明治時代の太田家の様子/『参陽商工便覧』須田町辻利八家文書

明治時代の太田家は、楠村と平坂村をまたがるように居を構えており、大小合わせて37棟もの建物を所有していました。また、明和元年（1764）に大給松平氏が西尾へ入国した際、海路で平坂に到着した藩士たちを地元富豪が分担して宿泊させており、太田庄兵衛家では19名の藩士を16日間もの間、受け入れた記録が残っています。この記録からも、太田家が江戸時代から広い屋敷や財力を持っていたことがうかがえます。

▶太田家と梵鐘

17世紀後半から18世紀終わりにかけて、三河では寺院の梵鐘の鑄造が盛んに行われました。太田家では、庄兵衛が桂岩寺の梵鐘をつくったことを皮切りに、盛んに製作するようになります。近隣だけでなく、遠くは岐阜県にも製作の記録が残っています。太田家が手がけた梵鐘は記録に残っているだけでも32口にのぼりますが、第二次世界大戦中の金属供出によって失われたものも多く、現存しているのは13口のみです。



太田家が江戸時代に製作した西尾市域の梵鐘一覧

和暦	西暦	寺院	状況	作者	和暦	西暦	寺院	状況	作者
1 寛文 12 年	1672	桂岩寺	亡失	庄兵衛	10 宝暦 8 年	1758	大槎律寺	現存	庄兵衛
2 延宝元年	1673	正念寺	亡失	庄兵衛	11 宝暦 10 年	1760	延長寺	亡失	甚兵衛
3 元禄 12 年	1699	徳受院	現存	庄兵衛	12 明和 4 年	1767	教蓮寺	亡失	庄兵衛
4 元禄 13 年	1700	源空院	亡失	甚兵衛	13 明和 8 年	1771	本法寺	亡失	庄兵衛
5 正徳 3 年	1713	竜讚寺	現存	甚兵衛	14 安永 4 年	1775	本法寺	亡失	庄兵衛
6 元文 2 年	1737	正念寺	亡失	庄兵衛 甚兵衛	15 天明元年	1781	願成寺	亡失	庄兵衛
7 寛保 3 年	1743	本澄寺	亡失	庄兵衛	16 天明 8 年	1788	祐正寺	亡失	甚兵衛
8 宝暦 3 年	1753	順覚寺	現存	庄兵衛	17 寛政 2 年	1790	満国寺	亡失	甚兵衛
9 宝暦 7 年	1757	阿弥陀寺	現存	庄兵衛	18 文政 2 年	1819	義光院	現存	甚兵衛
					19 嘉永 2 年	1849	養寿寺	現存	庄兵衛

▶平坂鑄物と鍋屋

梵鐘は、寛政12年（1800）ごろまでに近隣のほとんどの寺院でつくられたことで需要が少なくなります。一方、庶民の間で土鍋や土釜ではなく鉄製の鍋釜が使われるようになったことで、平坂鑄物師の主要製品は梵鐘をはじめとした工芸作品から、鍋や釜などの日用品へと変わっていきました。

「鍋屋」 辻利八

主に鍋釜を扱う商人を「鍋屋」と呼び、太田家は西尾や近隣の鍋屋と取引をしていました。辻利八家は太田家と取引をしていた西尾の鍋屋で、もとは金勝上山衣村（滋賀県栗東市）出身の近江商人でした。辻家は元禄4年（1691）に西尾須田町に店を構えると、東海道や平坂湊を利用して、辻村の商品を西尾に運んだとされています。しかし、重い鑄物製品を遠方から運ぶのは負担が大きく、やがて太田家の主要製品が鍋釜になると、辻村ではなく平坂の太田家から仕入れるようになります。最盛期には町の組頭、庄屋、西尾藩御用商人も務め、金属製品だけでなく、呉服や酒、鉄砲など幅広い商品を取り扱うようになりました。

第4章 近代化する西尾の鋳物

鋳物業で財を成した太田家は、その収益を土地へ投資するようになり、第10代・倭三郎の代には郡内有数の大地主に成長します。しかし、明治時代になり、地租改正が行われると、納税する地主の負担が大きくなり、小作料の値上げにつながります。そして、小作農と地主との訴訟問題に発展し、倭三郎は問題解決のために奔走することとなります。第12代・庄造の代になると、本業の鋳物業に力を注いだ一方で、石炭や塩田、紡績などの新しい事業にも挑戦しましたが、いずれも失敗に終わってしまいました。

さらに、鍋釜の生産が主体となったことで鋳物師の伝統的な技術を披露する場が減少したこと、「勅許鋳物師」としての特権が明治の変革により失われてしまったことなども重なり、太田家は衰退していきます。そして、太田家は明治27年（1894）に約220年続いた鋳物業を廃業することになりました。

▶ 組合の設立

太田家の廃業後、職工長であった奥谷広吉がその後を継ぎ、明治28年（1895）に工場を再興します。この工場はまもなく閉鎖してしまいましたが、そこで働いていた職人たちが次々と独立し、太田家の鋳造技術は平坂の地に受け継がれていきました。

さらに、松崎長之助や伊藤小三郎が中心となって、資材の斡旋、資金の融通、技術指導など、鋳物工業の育成に努めました。こうした支援もあって、大正10年ごろから昭和10年ごろまでにおよそ25もの工場が平坂につくられ、平坂鋳物は西尾が誇る伝統的な地場産業へと成長します。これらの平坂鋳物業者は、明治のころにはすでに秋葉山信仰を通じて仲間のまとまりをもっていました。大正10年（1921）に正式に「平坂鋳物同盟会」が発足します。同盟会はその後、何度かの改称を経て、昭和38年（1963）に現在の「西尾市鋳物工業協同組合」になりました。



昭和43年（1968）当時の西尾市鋳物工業協同組合の分布図
『西尾の鋳物 享保から令和へ』
西尾市鋳物工業協同組合 編（2021年）より引用

第5章 現在の鋳物産業

かつては身近な存在だった鋳物は、生活様式の変化から現在では使う機会は少なくなりました。

しかし、自動車部品や水道管、工作機械や産業機械の部品など、今も鋳物はあらゆる産業に利用されています。多くの産業の基盤となっていることから、「産業の米」とも呼ばれ、なくてはならない存在です。また、愛知県は「モノづくり県」とも呼ばれるほど製造業が盛んで、鋳物産業も全国1位を誇ります。なかでも県内の事業者数の約3分の1は西尾市に集中しており、西尾の鋳物産業の規模の大きさがうかがえます。

現在も西尾の地場産業として盛んな鋳物産業ですが、バブル崩壊やリーマンショック、人材不足などの影響により、事業所数は減少傾向にあります。そこで組合では担い手を育てるために、組合員の従業員の技能検定試験の対応や、組合内で相談や助け合いがしやすい環境づくり、フルタイムで働けない人や障がい者でも働きやすい環境の整備など、新しい形で伝統を受け継いでいくための努力を重ねています。

また、より多くの人に西尾の鋳物を知ってもらうために、組合ホームページの開設や会報誌「イモノフだより」の発行、地元の小中学校への教育普及、市民向けの鋳造体験教室の開催など、さまざまな取り組みを行っています。こうした取り組みを重ねながら、長年受け継がれてきた伝統を次世代へとつなぐ活動をしています。

市内で見られる鋳物たち



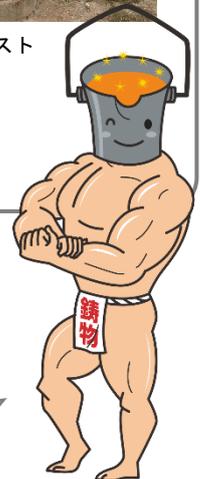
寺津大橋モニュメント



マンホール

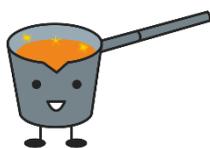


郵便ポスト



イモノフ

西尾市鋳物工業協同組合のホームページはこちらから→



いもよん

主催
西尾市立一色学びの館

協力（敬称略）
西尾市鋳物工業協同組合

